武術大会への参加を決めたアリーナ。
戦いを求め、騒ぐ格闘家の血は、しかし、少しのシャドートレーニング程度では、静まるものではなかった。

そのとき、彼女の寝室を訪れたエンドール王女モニカ。
自身の身に起こった事に対して、まるで自分のことに怒ってくれた事を感謝するモニカに対し、アリーナは遠い目で言うのであった。
「だって、あなたに‥‥あんなつらい思い、させたくないし」

アリーナは、わずか７歳のときに、政略結婚させられかけた事があったのである。その時の恐怖と不安が、心的外傷（トラウマ）として彼女の心に残っていたのだ。

アリーナの強さ、そしてつらい思い出を知ったモニカは、彼女の母の形見である、王家の守護石のペンダントをアリーナに手渡すのであった。
「碧玉（サファイア）‥‥？」
「これをお持ち下さいませ。私を護ってくれている母と、そして私自身の想いが、
今度はきっと、貴方を護りますわ」

＊

この物語は、後に「不屈の王女殿下（ハイネス）」と呼ばれる、サントハイム聖王国第一王女、アリーナ・フォン・サントハイム殿下の、熱く激しい闘いの記録である！

熱血格闘系・ドラクエ４二次創作小説

「不屈の王女殿下（ハイネス）」

～エニックス「ドラゴンクエスト４・導かれし者たち」第２章より～

第３話　「大会初日、早朝」

あさづけ兄貴

その、翌朝。

澄み切った天空の蒼を映す、素晴らしい秋の空。
小鳥が二羽、軽やかな歌声を残し、エンドール城の上空を飛び去る。

「ん‥‥ん〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

エンドール城、貴賓寝室。
開け放たれた窓のそばで、組んだ掌を上に向け、気持ち良さそうな顔で大きく伸びをする、栗色の髪の少女。
サントハイム聖王国第一王女、アリーナ・フォン・サントハイムである。

体を、ぐっと後ろに反らしながら、窓から部屋に流れ込む清涼な空気を、肺いっぱいに吸い込む。
「んん〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜‥‥っ」
体を起こし、リラックス。
「ふぅ‥‥」

窓の外に、目をやる。
山の紅葉混じりの緑と、空の蒼。
美しいコントラストが、目に飛び込む。

「んー、いい天気！」
心底、嬉しそうな表情で、アリーナは言った。

＊

今日は、いよいよ、第３５回エンドール国王杯武闘大会、その開幕の日である。

前日、ひょんなことから出場する事になってしまった、この大会。
アリーナにとって、この大会は、小さな頃からの憧れ、そして自らの強さを試す絶好の機会であると同時に、自分と同じ宿命に生まれた少女、エンドール王国第一王女モニカを救うための闘いの場でもあった。

人ひとりの人生を背負った闘い‥‥しかし、その前においても、アリーナの様子には、全くと言っていいほど、気負いは感じられなかった。

自らの責任の重大さは知りながらも、あくまでアクティブに、この状況を楽しもう‥‥
そう思える、天性の意思の強さと明るさを、アリーナは持っていたのである。

「さて‥‥」
ちらっと、鏡台（ドレッサー）の上の時計で時刻を確認すると、
「朝シャワー朝シャワー、と♪」
歌いながら、アリーナは、タオルを片手に、備え付けのシャワールームへと駆け込んだ。

＊

「ふっふふーん、ふふーん♪」
アリーナが、頭をタオルで拭きながら、鼻歌交じりで、シャワールームから出てくる。
生まれたままの姿である。

鍛え抜かれた格闘家らしく、腕や脚、腹部には、しっかりとした筋肉が付いている。
しかし、それは、決して彼女の体つきに、ごつごつとした男性的な印象を与えるものではなかった。
むしろ、滑らかな女性らしい曲線の内側に、途方もないパワーを内在した、そんな印象。
例えて言うなら、ビロードの美しい毛皮の中に、獲物を倒す圧倒的な力を持った「女豹」‥‥であろうか。
美しさと力強さとが矛盾なく同居した身体であった。

ベッドサイドのテーブルに置かれた着替えの服の、その一番上の下履き（スコート）を手に取り、手早く両足を通す。
王侯貴族の履くような高級な物ではなく、白と水色の横のストライプの、綿（コットン）製のシンプルなものである。

もちろん彼女は、国の行事でドレスを着なければならない時などは、高級な素材を使った、フリルやレースのたくさん入った下着を着ける。
しかし、そうでない時‥‥特に、格闘技の練習などがある時は、アリーナはこのような、吸水性の良い、動きやすい下着を着けることが多かった。

そして、もうひとつ‥‥

「よっ、と‥‥」

白い布のような物を、頭からかぶる。
上と左右に開いた穴から、頭と両手を出すと、両手で、その「裾」を少し下に引っ張り、ぴんと身体にフィットさせた。
白い布が、大きめの乳房を、しっかりと押さえるように包み込む。

胸当て(ブレスト)‥‥それも、普通の物と違う、彼女特注の物。
我々の世界で言うところの「スポーツブラ」にそっくりな‥‥丈が胸の下ぐらいまである、伸縮性のある素材で出来た胸当て(ブレスト)である。

我々の世界ですら、その「機能」に焦点を当てた女性用下着が作られ始めたのは、つい近年である。ましてや、科学の発達していないアリーナたちの世界において、このような下着は、当然、一般向けとしては存在していなかった。

しかし、ここに、そういった下着を‥‥激しい運動時にも乳房の揺れ、擦れを最小限に抑えるような、そんな機能を持った下着を、真に必要とする少女がいた。
そして、非常に幸運な事に、彼女は「王女」という立場に‥‥そう、やる気になれば、一流の職人に下着をオーダーメイドさせる事が可能な立場にいたのである。

彼女の懇願を聞き、サランの縫製職人が試行錯誤の末に作り上げた下着。それこそが、今まさにアリーナの着けたこの胸当て(ブレスト)なのであった。
並み居る男性格闘家や化物(モンスター)に対し、彼女が互角以上の戦闘力を持ち得る理由のひとつには、こういった下着によるサポート、というファクターもあったのである。

「ふう‥‥」
胸当て(ブレスト)にはさまった、肩より少し長い髪を、ふぁさっ、と、後ろにかき上げる。

十分にタオルドライされた髪が、朝の柔らかな光の中に広がり、揺れて、再び肩の後ろにおさまる。
美しい栗色の髪。

再び、着替えの服の山に手をやって‥‥ふと、アリーナの手が止まる。

ペンダント。
昨日、モニカ姫から借りた、エンドールの守護石‥‥碧玉(サファイア)を中心に戴いた、銀のペンダント。
首にかけたまま眠ってしまった事に気付いたアリーナが、朝、目覚めた直後、慌てて外

して、ここに置いたものである。

手に取る。
まるで今日の空のような‥‥いや、今日の空よりも深く蒼く澄んだ、碧玉(サファイア)の輝き。

モニカの言葉を、思い出す。

『私を護ってくれている母と、そして私自身の想いが、今度はきっと、貴方を
護りますわ』

碧玉(サファイア)の煌めきのその向こうに、アリーナは、モニカの想い、そして、代々エンドールを護ってきた女性たちの、その想いを見たような気がした。

「護ってね‥‥モニカ姫」
呟くと、アリーナは再び、ペンダントを首にかけた。

そこからは、手早い。
黒のストッキングを履き、頭から黄色いミニのワンピースをかぶる。
革のベルトを締める。バックルには、円と十字のサントハイムの紋章。
橙色(オレンジ)のブーツと手袋。
両耳に、小さな丸い翡翠(ジェイド)をあしらったイヤリング。
肩に、紺青(ディープブルー)のマントを留める。
そして、同じ色の‥‥頂が尖った、独特のデザインの帽子をかぶると‥‥

「よしっ、完成！」
鏡の前で、アリーナが微笑みながら言った。

サントハイムの全国民の憧れ、そして我々にも馴染みの深い‥‥アリーナ・フォン・サントハイム、そのいつもの姿であった。

と、その時‥‥

＊

トン、トン‥‥
ノックの音がした。

「お、ナイスタイミング！」
呟いて、アリーナは戸口へ駆けた。

ドアを開けると、良く見知った顔が二つ。
ブライとクリフトだ。

「おはようございます、姫様」
「おはようございまふ‥‥ふあ〜」

ブライは、いつもと変わらぬ顔。
それにひきかえ、クリフトは、目が充血し、目の下にクマが出来ている。
非常に眠そうに、生あくびなんぞしている。

「ど、どしたのクリフト？」
心配になったアリーナが訊ねる。
「は、はは‥‥ちょっと‥‥」
「ちょっと、じゃなかろうが」
気まずそうに、帽子の上から頭をかくクリフトに、あいかわらず苦虫を噛みつぶしたような顔で、ブライが言う。
「こやつ、昨日、一睡も出来なかったらしいのですじゃ」
ぎろりと、クリフトを睨む。

「す、すみません‥‥目が冴えてしまって、どうにも‥‥」
顔を赤くし、うつむくクリフト。
そして、再び顔を上げ、アリーナの顔を見る。

つややかな肌。強い意思をたたえた瞳。
健康そのもの、であった。

「姫様は‥‥ゆっくりお休みになられたのですか？」
「あったり前じゃない！」
クリフトの問いに、さも当然、といった口調で、アリーナは答えた。
「だって、大会の前日なのよ？ 寝不足で戦うなんてことになったら、目も当てられないじゃないの」
「そ、それはそうですが‥‥」

「だいたい、大事な日の前日に、しっかり睡眠を取らないなんて、愚の骨頂よ！」

もちろん、クリフトは、「睡眠を取らなかった」のではなく、「取れなかった」のである。
翌日に控えたアリーナの試合‥‥そのプレッシャーは、アリーナのみならず、クリフトにも同様にのしかかっていたのは言うまでもない。
そして、そんなプレッシャーを逆に楽しめるアリーナとは違い、クリフトは、プレッシャーがもろに影響してしまう、そんな性格であった。
生来の生真面目さが裏目に出てしまった、と言えよう。

もっとも、それでクリフトを責めるのは当たらない。
人間誰しも、プレッシャーが掛かるとこういう反応を示すものである。アリーナの精神構造の方が、むしろ特殊であると言うべきだろう。
ただ、だからと言って、それが今のクリフトにとって慰めになるかと言えば、当然そんなことはないのであるが‥‥。

両手を腰に当て、口を尖らせ、まくしたてるアリーナに、クリフトは何か言い返そうと思ったが‥‥それ自体が非常に無駄な行為に思えて、断念した。
「とほほ‥‥ええ、私が悪うございました」

「まぁまぁ姫様、それぐらいにしてやって下され」
ブライがたしなめる。
「それよりも、早くエンドール王に会いに行きませぬと‥‥」
「あっ！ いっけない！」
ブライの指摘に、掌を口に当て、素っ頓狂な声をあげるアリーナ。
「二人とも、急ぐわよ！」
そう言うと、我先に、すたすたと廊下を歩き出した。

「やれやれ‥‥」
クリフトは、胸をなで下ろしていた。

＊

「眠い？」
王の間に続く廊下の中途で、アリーナが不意に、クリフトに言った。

「えっ？」

急な質問に、一瞬戸惑ったクリフトであったが、すぐ真剣な顔に戻り、言った。
「大丈夫です！ 姫様が大事な試合を控えた今、眠いだなんて言っていられません！」

（思いっ切り言ってるじゃない、「眠い」って）

仕事のことではいざ知らず、普段の会話では隠し事の出来ない、クリフトらしい言葉。
それを聞いたアリーナは、くすっ、と少しだけ笑って、言った。
「あと５分早く迎えに来てくれれば、目覚めバッチリだったのに」

「えっ？」
発言の真意を判りかねて、クリフトが聞き返す。

「５分前ぐらいだと、ちょうどシャワー浴び終わって‥‥下履き（スコート）履いたあたりね。
クリフトだったら、特別大サービスで、見せても良かったかなぁ‥‥」

上目づかいで、クリフトの瞳を見つめるアリーナ。
その言葉に、クリフトが固まった。

「す‥‥すこー‥‥と‥‥履いた‥‥あたり‥‥？」
その言葉の意味を正しく認識した瞬間、首から顎、口、鼻、目‥‥クリフトの顔が、下から、まるで朝日が昇るように、赤くなっていった。
「す、下履き（スコート）って！ ひ、姫様！ ひひひ姫様にお仕えするべきここの私が、そんないい卑しくも姫様の下履き（スコート）一丁のお姿など拝見するような事は決してそんな事は！」

酔っぱらったように真っ赤になりながら、しどろもどろに言うクリフト。

「なーんて。冗談よ、じょ、お、だ、ん！」
右手をひらひらと上下に振り、けらけらと笑いながら、アリーナが言う。
「へ？」
クリフトの顔の赤味が、さっきとは逆に、上のほうから順に引いてゆく。
「いくらクリフトでも、見ちゃダメなものは、ダ・メ。ま、どーしてもって言うんなら
命と引き換えね」
笑顔で、さらっと恐ろしい事を、アリーナは言ってのける。

「あ、冗談ね‥‥ははは‥‥」
汗をハンカチで拭きながら、クリフトが引きつった笑いを浮かべた。

ブライは、あいかわらず苦虫を噛みつぶしたような顔で、

（まったく‥‥一国の王女ともあろう者が、あんな風に男をからかうなど、本当に
　嘆かわしい事じゃわい。まあ、からかわれるクリフトもクリフトじゃが‥‥）

などと考えながら、後ろをすたすたと歩いている。

だが、彼には分かっているのだろうか。
アリーナがこんな冗談を言う相手、こんなからかい方をする相手が、この世にクリフトただひとりしかいない、ということに。

＊

と、そんな時である。

「あれ？　姫様、それ‥‥」
クリフトが、声をあげた。
「ん？　なに？」
「その首の‥‥ネックレスのような‥‥」

アリーナが、モニカ姫から借りたペンダント。
彼女は、ペンダントを外から見えないように、服の下にかけていたのだが、その首にかかった鎖に、クリフトが気がついたのである。

「ああ、これ？」
そう言うと、アリーナは、襟元からペンダントを引き出した。
掌の上で、青い宝石が輝く。

「ペンダント‥‥ですか？」
「そ。モニカ姫が貸してくれたの」

「ほう？」

ブライが、後ろから、アリーナの掌を覗き込み‥‥目を、くわっ、と見開いた！

「姫様！　こ、これは‥‥『モニカ姫が貸してくれた』とおっしゃいましたな？」
「そ、そうだけど‥‥どしたの、一体？」

ブライの額に、一筋の冷や汗が流れる。
「<大いなる蒼のエンドール>‥‥」
「えっ？」
アリーナが聞き返す。

「間違いあるまい。<大いなる蒼のエンドール>‥‥建国の古より、エンドールの王妃に代々受け継がれて来た伝説の宝石、エンドールの国宝ですじゃ。儂もこの目で見るのは久しぶりじゃが‥‥」
「へー。凄いんだ、これ」
「凄いも何も‥‥」
もう一筋、ブライの額から冷や汗。そして彼は言った。
「姫様、一刻も早く、これをモニカ姫にお返しなされ」

「ちょ、ちょっと、何言い出すのよいきなり！」
アリーナが思わず声を荒らげる
「これは、エンドール王妃あるいは王女だけが身につける事を許される物。姫様が身につけている事が他に知れれば、大問題になりますぞ」
「で、でも‥‥」
「まあ、姫様があのエンドール王のところに嫁に行く、ということであれば、話は別ですがな」
「‥‥笑えない冗談言わないでよね」

不機嫌な表情のアリーナだが、あえてそれを気にせず、ブライは言う。
「まあ、他に抜け道がないわけではありませぬ。この石の今の正式な所有者はモニカ姫のはず‥‥彼女が特別に貸してくれたというのなら、姫様が身につけるのも、特例として認められる可能性はありますじゃろう。
何にせよ、王に掛け合う必要はあるでしょうな」

「‥‥そうね‥‥」
うつむいたまま、アリーナはとぼとぼと、王室への廊下を歩いていった。

＊

「おお、アリーナ姫。昨夜は良く休まれたかな？」

エンドール城、王室。
王は、上機嫌であった。

「ええ、おかげさまで」
アリーナも、作り笑顔で答える。

「それは良かった‥‥」
と、王が言いかけたところで、隣に座っていたモニカが口を挟む。
「何よりですわ」

「あ、モニカ姫、ゆうべはどうもね。美味しかった」
モニカに対しては、ごく自然な笑顔で、アリーナは答えた。

「ところで‥‥」
突然、王が言った。
「その昨夜の件なのだが」

アリーナの表情が、曇る。
彼女は、手に持っていたペンダントを、目の高さに掲げる。
うつむいたまま、言う。
「これ‥‥ですね？」

「左様」
真剣な面持ちで言う王。
「お父様！」
モニカが叫ぶ。叱責する口調だ。

ここにいる誰もが‥‥そう、アリーナさえも、このペンダントを返すように、と王が言い渡すものと思っていた。
だが‥‥

「分かっている、モニカ」
モニカ姫にそう言うと、王は厳かに、こう続けた。
「アリーナ姫。その宝石‥‥＜大いなる蒼のエンドール（エンドール・グラン・ブルー）＞は、この＜大いなる紅（エンドール・グラン・

エンドール（ルビ：ジュ）＞と対となるもの。元来、王室の女以外には身につける事を許されぬ者。
お分かりだな」

胸にぶら下げたペンダントを掲げる。
繊細な金細工の台座の上に、輝く大きな紅玉（ルビー）。
アリーナの持つモニカのペンダントと、色以外は、ほぼ同一のデザインであった。

「はい‥‥」
アリーナは、力なく答えた。
王は、うなずくと、一呼吸おいて続けた。
「だが、物事には必ず『例外規定』というものがあってな」

「えっ？」
アリーナが、顔を上げる。
「その所有者が特別に許可した場合は、その限りではないのだ。今回はアリーナ姫にはぜひとも勝ってもらわねばならぬ。これをお貸しする事でそれがかなうなら、安いものだ」

「‥‥！」
アリーナと、そしてモニカの顔が、ぱっと明るく輝いた。

「あ、ありがとうございますっ！」
「私からもお礼申し上げますわ、お父様」
頭を下げるアリーナ、微笑むモニカに、王は表情を変えずに言った。
「うむ、苦しゅうない。ただ‥‥アリーナ姫、ふたつだけ、約束してはもらえぬか」
「約束‥‥？」
「左様」
やはり、王は表情を変えない。
「まず、大会中、その＜大いなる蒼のエンドール（エンドール・グラン・ブルー）＞を決して他人には見せぬ事」

（確かに‥‥）
後ろで控えながら聞いていたブライの頭脳が、回り出す。
（エンドール王家は姫様を支援できぬことになっておる。その姫様が、エンドール王家の宝玉を持っておることが知れれば、申し開きができぬ、ということじゃな）

「分かりました」

はっきりと、アリーナが答える。

「うむ。それと、もうひとつ‥‥」
王が答え、言葉を続ける。

そこで、ややしばらくの間。

（王様‥‥？）
（一体、何を言い出すつもりなのだろう‥‥）
（よもや、とんでもない条件を出すつもりではあるまいな）

アリーナ、クリフト、ブライ、三人が三人とも訝しげに思う、まさにそのタイミングで、王は、わざとらしく明るい口調で、言った。

「ちゃんと、返してもらうぞ」

がくっ！
３人とも、揃って、腰の力が一瞬抜けるような感覚に襲われた。

「お、王様‥‥」
体勢を立て直したアリーナが、困り顔で言う。
「そんな心配していただかなくても、ネコババしたりしませんよ、私たち」

「はっはっは、冗談だ、冗談」
「‥‥」
高笑いするエンドール王。対照的に、アリーナはぶすっとした表情だ。
（まったく、この王様といい、うちの頑固爺（ブライ）といい、どうしてこう笑えない冗談ばかり言うのかなぁ‥‥本当にもう）

＊

「あ、そうだ。王様」
ふと、アリーナが、何かに気がついたような表情で、言った。
「ひとつ、お聞きしたい事があります」

「ほう。申してみよ」

なにげなく答えながら、王は、既に気がついていた。
アリーナの瞳が、先程とは打って変わって、非常な「力」に満ちていることに。
「怒り」にも似た、意志の力。

「昨日、選手名簿を見せていただきました」
「ふむ」
「私の名前が‥‥伏せられていたのは、何故ですか？」

しっかりと、王の顔を見つめながら、アリーナは言う。

「ぬっ！」
ブライが思わず声を上げる。
昨夜、この件で話した際、アリーナは、自分が大会の客寄せに利用されているかも知れない、ということに対し、（当然のことだが）非常な不快感を表している。
王の返答次第では、アリーナの怒りが爆発しかねない、非常に危険な質問を、アリーナは真正面から、王に問うたのである。

もちろん、この場で、アリーナが怒りに任せて行動してしまっては‥‥

（いかん‥‥これは一大事になる‥‥）
ブライの額を、昨日から数えて幾度目かの冷や汗が、流れ落ちる。

睨む、と言っていいほどきつい目つきで、エンドール王の瞳を見つめるアリーナ。
それを受け止めて動じない、エンドール王。

クリフトが、思わず、ごくりと生唾を飲み込む。
モニカも、何も言えず、ただ、父の顔とアリーナの顔とを、何度も見比べるのみ。

王の間に、緊張感が満ちている。
空気がそのまま凝固してしまったような、重苦しさ。
まるで、闘技場（コロシアム）に先がけて、王の間で武術大会が始まってしまったような。
言い知れぬプレッシャー。

それにしても、このエンドール王の余裕はどうだ。
幾多の化物（モンスター）と、文字通り命のやり取りを繰り広げてきたアリーナの、烈火のごとき眼差しに、怯（ひる）むどころか、真っ向から受け止め‥‥

その上でなお、この余裕の表情。

やがて、満を持して、王は口を開いた。
先程と全く変わらぬ口調だった。
「そのような怖い顔をせずとも良い‥‥アリーナ姫、そなたの名を伏せさせてもらったのは、そなたを守るためなのだ」

「えっ？」
アリーナの目つきが、一瞬緩む。

ほんの少し、優しい眼差しをして、王が言う。
「もし、この大会にそなたが出場することを触れ回れば‥‥その瞬間から、そなたの身に危険が及ぶことになる。大会での対戦相手を暗殺しよう、などと思う不埒者がいないとも限らないであろう？」

「あっ‥‥」
虚を衝かれたアリーナの表情。

「こう見えても警備には気を使っておるのだが、万一の事があっては、サントハイムの国王陛下に会わせる顔がないからな。事後承諾になってしまって、申し訳ないことをしたと思っている」
そう言って、王は、王冠を取り、頭を下げて見せたのである。

「え、あの、いえ、いいんです‥‥ちょっと勘違いしてました」
先程の険しい表情から、逆にちょっと困り顔になりつつ、両手を胸の前でひらひら振って、アリーナが答える。
「勘違い？」
「ええ。もしかして、私って客寄せのために利用してされてるのかな、なんて思っちゃって」

それを聞いた瞬間、ぴくっ、と、ほんのわずかに、王の右眉が動いた。
が、恐らく、それを見て取れた者は、その場にはいなかったであろう。

「はっはっは」
王は、高らかに笑った。
「他国の王女様を、その身を危険にさらしてまで広告塔に仕立て上げる事など、余には

　出来ぬよ。そんなリスクを冒す気には、とてもなれぬ」
「そう‥‥ですね。ごめんなさい。変なこと言ってしまって」
「良い」
頭を下げたアリーナに、王は微笑みをたたえた表情のまま、答えた。、

緊張感が、消えてゆく。

「ふう‥‥」
人に聞かれぬほど小さな声で、ブライが小さな溜め息をもらす。
同時に、
「ふう‥‥」
こちらは傍から見て分かるような溜め息を、モニカがついた。

そして、
「ふうう‥‥」
さらに大げさな溜め息を、クリフトがついていた。
昨日同様、また、凝固していたらしかった。

＊

その時である。
アリーナたちの後方、王の間の入り口の扉が、勢いよく開いた。
「！？」
思わず後ろを振り向く３人。

入り口に立っていたのは、エンドール城の兵士であった。
革の鎧（レザーアーマー）をまとい、鋼の剣（スティールソード）を腰に提げている。兜（ヘルム）はつけていない。
必要最小限の、比較的簡素な装備だ。
髪を短く刈り揃えた、精悍な若者である。

「申し上げます！　大広間（グランドホール）の準備、整いましてございます！」
大声で言う。

「おお、準備が出来たか！　‥‥ご苦労。下がって良い」
「はっ！」

兵士は、王に敬礼すると、くるっときびすを返し、王の間から駆け出していった。

「お聞きの通りだ。抽選会の準備が出来た。さっそく会場へ‥‥」
王はそう言いかけたが、やや間を取り、そして続けて言った。
「‥‥と言いたいところだが、そなた達は抽選会の途中、参加選手３２名の組み合わせが決まってから、会場に入っていただきたい」
「途中で‥‥とな？」
「しかし、それでは、姫様の対戦相手が選べないのでは‥‥」
ブライと（珍しく）クリフトが、それぞれ疑問の声を上げる。
「それは大丈夫だ」
王が答えた。重みのある声。
「会場の混乱を避けるためだ。申し訳ないが、ご協力願えぬか」

「分かりました」
アリーナの明るい声だった。
思わず、アリーナとブライが、斜め後ろから、アリーナの顔を見やる。その視線に気付いたアリーナが、ブライとクリフトの顔をそれぞれ、きょろきょろっと見ると、にこっ、と微笑みを浮かべた。
「どーせ、どういう組み合わせになっても、最後には強い人と当たるんだから。おんなじよ」
「そうですな」
思わず、苦笑するブライであった。
（まったく、姫様のこの精神力だけは、心底尊敬するわい）

＊

「そなた達は、階上の控え室で待っていていただきたい。そこには、大広間（グランドホール）を覗ける窓もある‥‥あらかじめ、選手たちを見ておく事もできるだろう」
「はい！」
「うむ。では、行くとしようか。モニカ」

傍らに座るモニカを促し、王は席を立った。
小柄の体格ではあるが、その体格に似合わぬ威圧感を、王は周囲に与えていた。

「はい」
モニカも、ドレスの裾を気にしながら、席を立つ。

アリーナたちも、立ち上がった。
その傍らを、王とモニカが通り過ぎた。

その瞬間、モニカが、アリーナに向かって、ぱちっ、と、ウインクした。
そして、ちょっとはにかんだような微笑み。
（応援してますわ）
そんなモニカの心の声が、アリーナには聞こえたような気がした。
（うん。ありがとう）
アリーナも、ウインクとサムアップで、それに答えた。
それを見たモニカは、再び微笑むと、王の後につき、歩いていった。

「途中までは道は一緒だ。余の後について来られよ」
王の声に促され、アリーナたち３人は、扉の外へと消えていった‥‥。

＊

「何なんだ、これは！」
野太い声が、大広間（グランドホール）に響く。

「何が『特別招待選手、その正体は秘密』だ！ エンドール王は俺達を馬鹿にしているのかッ！」

顎と言わず口と言わず、顔中が髭に被われたかのような容貌の、筋肉質の大柄な男が、叫んでいる。

ここは、エンドール城、大広間（グランドホール）。
先刻より、この広間に、第３５回エンドール国王杯争奪武術大会、その出場予定者３２名のうち、３１名までが、集まっているのである。

壁に、大きな字で書かれた出場予定者名簿が貼り出されてある。
そして、そこにも、アリーナたちが読んだものと同様に、

名前：？
流派：？
解説： ３３人目の出場者。特別招待選手。その正体は秘密

という解説が、付け加えられていたのである。

「なあ、そうは思わないか？」
先ほどの大柄な男が、そばの壁に寄りかかり、目を閉じていた、緑色の拳法着の男に話しかけた。

しばらくして‥‥その男は、目を閉じ、腕を組んだまま、静かに言った。
「思わぬ」

「‥‥なにィ？」
大柄な男が語気を荒らげる。

壁に寄り掛かった男は、目を開き、やはり静かな口調のまま、言った。
「この大会に際して、王が何かを企んでいることは間違いあるまい‥‥だが」

その姿勢のまま自分に向けられた、その男の視線に、一瞬、大柄の男がたじろぐ。
（なんだ、こいつ‥‥この目つき‥‥ただもんじゃねぇ）
冷や汗が、大柄な男の頬を伝って流れ落ちる。

「たとえどんな相手でも、勝てば良い。それ以外に道はない‥‥違うか？」
男は、落ち着き払ってそう言うと、体を起こした。
「そう思えぬのならば、こんな大会には出ない事だ」
そう言い残し、その場を後にする。
その背中に、長い弁髪が揺れていた。

「ぐ‥‥ぬぬ」
面子をつぶされ、顔を赤くして怒る大柄の男。しかし‥‥
（あの弁髪‥‥まさか、あの男‥‥）

＊

「さすがですね」

大柄な男の許を去った弁髪の男に、歩み寄り、話しかける者がいた。
弁髪の男よりやや長身。細身で細面、どちらかと言うと優男風の印象を受ける。

青い短衣(チュニック)に白いズボンを履き、足首のところを紐で結わえてある。
長めの髪を、無造作に後ろで束ねていた。

「あのような台詞、貴方でなければ言えませんよ。＜拳聖＞ミスター・ハン」
そう言って、軽く微笑んだ。

ミスター・ハン、と呼ばれた弁髪の男は、その男の方を向き直った。
「貴公は？」
「おっと、これは失礼。私の名はラゴス‥‥ブーメラン使いです」
「ほう‥‥貴公があの」
「お聞き及びとは、光栄至極」
わざとらしく、大げさなポーズで、ラゴスは頭を下げた。
「貴方のおっしゃる通り、どんな相手でも、勝てば良い。そう‥‥たとえ貴方であろうとも、我が＜トライメラン＞の前には、敗北の二文字あるのみ。そうお心得いただきましょう」
そう言って、再び、微笑む。
しかし、目は微笑んでいなかった。
冷たい、刃のような視線。

「フフ‥‥」
ハンは、目を閉じ、楽しげに笑った。
「いいだろう。貴公との戦いを楽しみにさせてもらおう‥‥ブーメラン使い」

＊

「＜拳聖＞ミスター・ハン‥‥ブーメラン使いのラゴス‥‥」

大広間(グランドホール)の隅に、奇妙な風体の人物がいた。
頭から、深緑色(ダークグリーン)の長いフードを、すっぽりとかぶっている。
表情はまるで伺えない。

「確かに強い、二人ともただ者じゃない‥‥けど」

だが、ひとつだけ。
フード越しにもわかる、大きな胸、まろやかなボディライン。
それは、まぎれもなく、女性の物であった。

「どちらにしろ、このビビアンの敵ではないわ」

＊

「ふん‥‥」
鼻を鳴らした、男。
先程、ハンに恥をかかされた男より、更に一回り大きい‥‥「巨大」という表現がぴったりの男であった。
髪を短く刈り揃え、口ひげを蓄えている。

「たいした自信じゃねぇか、姉ちゃん」
その男が、ビビアンの横に、いつのまにか並んでいた。
「どうやって勝つつもりかしらねぇが、お前みたいな細っこい姉ちゃんが、あいつらにも、そして俺にも、勝てるわけがねぇ。怪我する前にやめとくんだな」

「親切なご忠告、ありがとう」
全く心のこもらぬ声で、ビビアンは返した。
「でも、そうなったら、怪我するのは貴方‥‥いや、怪我じゃなく、火傷ね」

そう言い残して、ビビアンは去っていった。

「‥‥へっ。口の減らねぇ女だ」
男は、悪態をついた。
「怪我だか火傷だか知らねぇが‥‥何にせよ、この＜鋼のサイモン＞の体にちょっとでも傷をつけられる奴なんざ、この世にゃいやしねぇさ」

＊

「ぐふふふふふ‥‥」
先ほどのビビアンの風体は確かに奇妙であった。だが、この男の風体は、もっと奇妙であった。
いや、「男」と言っていいものか。
丸々とした体躯。
体中にびっしり生えた、白く長い毛。
腰布以外は、全て裸。

むしろ「化物(モンスター)」と言った方がしっくり来る、そんな容貌であった。

「みんな、弱そうなんだな。これなら、優勝なんて簡単にできそうなんだな。
　ぐふふふふふ‥‥」

＊

第３５回エンドール国王杯争奪武術大会。
これらの、一癖も二癖もありそうな出場者たちに、アリーナはどう立ち向かっていくのであろうか？

（つづく）

＜次回予告＞

ついに、運命の組み合わせ抽選会が始まった！

居並ぶ、屈強な選手達。
彼らの様子を控え室から見ながら、アリーナは一体何を思うのか？

「不屈の王女殿下(ハイネス)」第４話　「組み合わせ抽選会（前編)」

彼女の真の「ライバル」は、一体誰なのか‥‥？